

同時開催

芹沢銈介が集めた世界の絵画

展示室の後半3室では、芹沢銈介の収集品の中から、芹沢の収集の原点でもある日本の小絵馬をはじめ、各国の聖画像(イコン)など、芹沢が愛した絵画100点をご紹介します。



南部小絵馬 享保十八年

ガラス絵「聖アグネス」 (ルーミアニア)

イベントのご案内

◆講演会「芹沢銈介と挿絵の仕事」
—佐藤寿夫作『極楽から来た』の新聞連載を通して—
講師: 門脇佳代子氏
(東北福祉大学教育学部教育学科 講師
東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 研究員)
日時: 8月11日(土・祝) 13:00~14:30
会場: 登呂博物館1階交流ホール
会費: 無料(ただし本展の半券が必要)
申込: 事前にお電話にてお申し込みください(先着50名)

◆ワークショップ「小絵馬を作ろう!」
日時: 7/28(土)、8/4(土)、12(日)、18(土)、25(土)、
10/6(土)、7(日)、8(月・祝) (計8回)
13:00~15:30(受付は15:00まで)
会場: 美術館出口
対象: どなたでも(要観覧料・お一人様一つまで)

◆呈茶イベント「芹美であじわう静岡茶」
日時: 7/29(日)、8/5(日)、10(金)、11(土・祝)、
12(日)、19(日)、26(日) (計7回) 10:00~16:00
協力: 日本茶インストラクター協会静岡支部
会場: 美術館特別室
対象: どなたでも(要観覧料)

●会期中、さまざまなイベントを開催します。詳しくは、ホームページをごらんいただくか、お電話にてお問合せください。(TEL: 054-282-5522)

開館時間

9:00~16:30 (全館閉館)

休館日

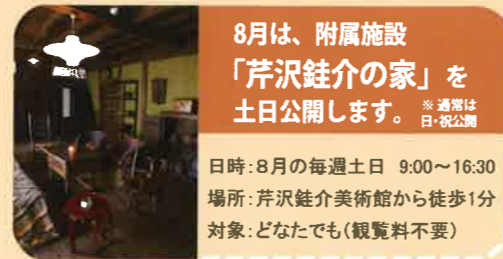
毎週月曜日 (7/16、9/17、9/24、10/8を除く)、
7/17、9/18、9/25、10/9

観覧料

一般 420円 / 高校生・大学生 250円
小学生・中学生 100円 / 未就学児無料
(団体割引30名以上50円引き、小中学生は20円引き)
※静岡市内在住または静岡市内の小中学校に在学中の方は無料
※静岡市内在住70歳以上の方、身体障がい者手帳等の交付を受けている方とその介助者1名は無料

交通

【バス】 静岡駅南口22番バスのりば「登呂遺跡」行き乗車、約12分終点下車、徒歩3分
【タクシー】 静岡駅南口から登呂公園へ、約10分
【東名高速】 静岡インターより、約10分
【駐車場】 登呂公園南側に有料駐車場があります(普通車400円/1日)



8月は、附属施設「芹沢銈介の家」を土日公開します。 ※通常は日・祝公開

日時: 8月の毎週土日 9:00~16:30
場所: 芹沢銈介美術館から徒歩1分
対象: どなたでも(観覧料不要)



柳宗悦著『仕事の日本』の小間絵原画 (1945年) 【日本民藝館蔵】

芹沢銈介のイラストレーション

2018・7・15(日) ⇒ 11・25(日) 静岡市立芹沢銈介美術館
【出品協力】 柏市、日本民藝館
静岡市駿河区登呂五丁目10番5号(登呂公園内) TEL: 054-282-5522 www.seribi.jp

芹沢銈介はイラストレーションの名手でもあります。もともと優れた画才があった芹沢ですが、デザインを学び、20代後半から染色を手がけたことで表現の幅が広がり、独自のスタイルを築いていきました。その成果は、雑誌や単行本の小間絵、連載小説の挿絵といったイラストレーションに凝縮されています。肉筆、合羽刷、型染などの多彩な手法を駆使し、人物、自然、風景、手仕事、歴史上の出来事、童話の世界、現代の暮らしに至るまで見事に表現しています。

随筆

芹沢は、雑誌「工藝」に提供したものを皮切りに、まず肉筆による小間絵を手がけています。随筆に提供した例も多く、『Letters from Shimane and Kyusyu』(1934)をはじめ、式場隆三郎の『微笑亭夜話』(1940)にも数多くの小間絵を提供しました。



式場隆三郎著『微笑亭夜話』の小間絵原画 (1940年)



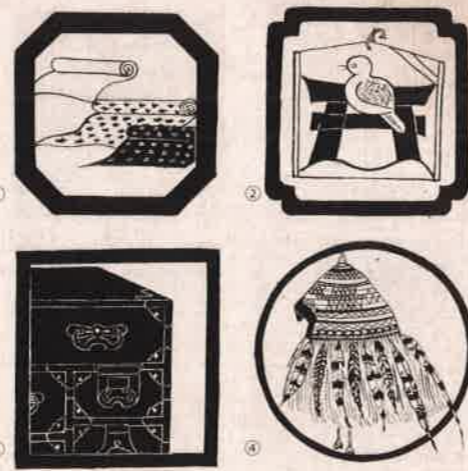
ラフカディオ・ハーン著、寿岳文章訳『Letters from Shimane and Kyusyu』の小間絵 (1934年)



神保光太郎著『アラビヤ夜話』より「アリババと四十人の盗賊」の挿絵 (1947年)

手仕事

芹沢が愛してやまなかった手仕事も、数多くイラストの主題としてとりあげています。その代表的なものは『手仕事の日本』の小間絵で、肉筆画でありながら型を思わせるような完璧な模様仕上げられています。型による小間絵も昭和18(1943)年ごろから手がけるようになり、肉筆と型の両方を使い分けることで、さらに内容が豊かになっていきました。『民藝と生活』では型によって手仕事の世界を見事に表現しています。



柳宗悦著『手仕事の日本』の小間絵原画 ①越後小千谷 小千谷縮 ②陸中 小絵馬 ③陸前 仙台草苜 ④羽前 尾花帽子 (1945年)【日本民藝館蔵】



式場隆三郎著『民藝と生活』(私家版)より「厚司 刀綾 切伏文」(1944年)



式場隆三郎著『民藝と生活』(私家版)より「土をねる」(1944年)

連載小説



芹沢銈介作『極楽から来た挿絵集』より「上人頭光踏蓮園 関白九条兼実感見」(1961年)



芹沢銈介作『十三妹挿絵集』より「十三妹と白玉堂」(1967年)



芹沢銈介作『極楽から来た挿絵集』より「一心専念」(1961年)

昭和35(1960)年には、佐藤春夫の新聞連載小説「極楽から来た」(173回)の挿絵を型染で手がけました。型染による連載小説の挿絵は、新聞社にとって初の試みでしたが、約半年にわたった連載が進むにつれ毎日掲載される挿絵を楽しみにする読者が増え、切り抜いて保存する人も少なくなかったといわれます。この年、文化勲章を受章した佐藤春夫も「いい挿画家を発掘し得たと大に満足した」と記しています。その後も武田泰淳の「十三妹」、石野径一郎の「守礼の国」などの連載小説挿絵を手がけました。

肉筆、そして型染。 広がる芹沢銈介の イラストレーションの世界

物語

戦後まもない昭和20年代前半には、子ども向けの物語の挿絵を、肉筆や型染で手がけました。単行本として出版された『アラビヤ夜話』や『キリシタン物語』、雑誌「少女の友」に掲載されたフィンランド童話や聖書物語などがありますが、いずれも温かく夢のある雰囲気仕上げられています。



芹沢銈介作「キリシタン物語『珍しい物を 持って来る南蛮人』」(1940年)



「フィンランド童話より 森の中の花嫁」の挿絵 (『少女の友』1946年)



芹沢銈介作 ガラス絵下絵「フィンランド童話 三つの函」(1946年)

芹沢は新聞連載小説だけでなく、現代小説の挿絵も制作しています。芥川龍之介の「鼻」や「泰教人の死」、武田泰淳の『風媒花』などが挙げられますが、特に後者は昭和20年代を舞台にしており、現代の風景、登場人物の心理描写を型染で巧みに表現しています。



武田泰淳著「風媒花」の挿絵下染 (1968年)



武田泰淳著「風媒花」の挿絵下染 (1968年)



芥川龍之介著「鼻」の挿絵下染 (1966年)

芹沢銈介のことは 小間絵について



下絵を描く芹沢銈介 (1980年)

「(前略)又古製鉄つば、古染付の皿や香合、李朝の水滴、又猪口や石皿に常に小間絵の心と通ずるものを感じています。局限された空間に溢れる大きな世界、堅固な造形。たゞへられた自由さ豊かさに打たれるのです。私は自分の気持ちを盛り上げてゆける仕事としてこの小間絵を好みます。」
『続小間絵集』付録 (1965年)